

朝鮮における終戦と引揚げ

李 炯 喆

The End of the War and Repatriation in Korea

Hyong Cheol LEE

抄録

1945年8月の敗戦から日本人の引揚げが概ね終わる翌年の春までの期間を時代の範囲として、主に仁川とソウル地域で敗戦と解放を迎えた日韓両国民の対応と認識を検証する。外地で終戦を迎えて引揚げを余儀なくされた数百万人の日本人の中には言葉に尽くせない悲惨な目にあった人々も大勢いた。しかし、北緯38度線以南の韓国では植民地当局が温存したため極端な無秩序を招くことはなかった。支配と被支配の関係が逆転したため、私怨による報復と様々な犯罪などはあったものの、韓国人と日本人は割と円満に分かれた。残留を希望した日本人もいたが、米国の命令で引揚げざるを得なく、持ち出す財産にも厳しい制限があった。それでも引揚者は日本の地を踏んだが、帰郷できずに残された日本人もいた。終戦から70年以上過ぎたため、当時代を正確に記憶する経験者も80歳を遥かに超えてしまった現在、文献の記録と証言を通して当時代を再構築する。

キーワード

敗戦・解放、進駐軍、世話会、引揚げ、残留日本人

はじめに

終戦の際、朝鮮には70万人余の日本人が常住していて、朝鮮の全人口の3%に過ぎなかったが、植民地統治機構の要職の殆どは日本人によって占められ、商業、工業、金融、教育などの経済と社会の主導権も日本人が握っていた。朝鮮人の中にも大地主、経営者、文化人として上り詰めた人も現れたが、成功したとはいえ、主役は日本人であり、朝鮮人らはマージナルな存在であった。それが植民地主義の本質である。

敗戦によって35年間続いた日朝間の支配関係が断絶されるとともに、日本人は朝鮮を離れねばならなかった。朝鮮に居住していた日本人の中には、幼児期に母に抱かれて日本から朝鮮に移住した人、朝鮮で生まれ育った人、朝鮮を安住の地と思って定着を決めた人も大勢いた。しかし、敗戦がもたらした現実には朝鮮を故郷、または第二の故郷と思っていた彼らの夢を砕く過酷なものであった。

本稿においては、1945年8月の敗戦から日本人の引揚げが概ね終わる翌年の春までの期間を時

代の範囲として、主に仁川とソウル地域で敗戦と解放を迎えた日韓両国民の対応と認識を検証する。海外で敗戦を迎えた大勢の日本人が引揚げの際に悲惨な目に遭ったが、米軍占領下の韓国地域では私的な報復、様々な犯罪行為はあったものの、組織的な報復・虐待はなく、韓国人と日本人は割と円満に分かれた。残留を希望した日本人もいたが、米国の命令で引揚げざるを得なく、持ち出す財産にも厳しい制限があった。それでも引揚者は日本の地を踏んだが、帰郷できずに残された日本人もいた。終戦から70年以上過ぎたため、当時代を正確に記憶する経験者も80歳を遙かに超えてしまった現在、文献の記録と証言を通して当時代を再構築する。筆者は戦後生まれであるが、子供時代の韓国にはまだ植民地時代の遺産が残っており、時々親たちも日本人引揚げの話をしてくれた。日本研究をしている内に、韓国からの引揚げは、北朝鮮と満州からの引揚げとは大分違うことが分かったため、史実に基づいた事実関係を明確にするのが、本稿の目的である。

1. 両国民の反応

太平洋戦争の末期、日本本土では米軍の空襲によって主要都市が破壊されて焼野原に帰したが、朝鮮に米軍機が飛来して北朝鮮の北部地域を空爆したものの、殆ど被害は軽微なものであった。戦争が日増しに不利になることは日本人も朝鮮人も知ってはいたが、日本が早く降伏するとは信じていなかったであろう。日本人も朝鮮人も将来への準備がないまま、敗戦または解放を迎えた。

(1) 日本人の対応

終戦後の朝鮮からの日本人引揚げ記録である『朝鮮終戦の記録・資料編第二巻』から終戦の光景を見てみよう⁽¹⁾。

8月15日、大詔渙発せらるるや、内鮮人共に極度の衝動を蒙り、一時は呆然たるものありしが、日本人側は一切を挙げて官の措置に俟つの態度を以って冷静に推移せるが、朝鮮人側に於いては、停戦に依るポツダム共同宣言の受諾を見るときは、朝鮮は直ちに日本より解放せられて独立するものなりと誤解し、終戦平和到来の安堵と朝鮮独立歓喜の情に興奮し、これに一部不穏分子の巧妙なる煽動あり、8月16日京城府内の目抜き場所を中心として、多衆民の街頭示威運動の展開せらるるに及べり。

仁川の旭国民学校1年生吉原勇は「放送が終わると、大通りの防火水槽の周りに人がわっと集まってきた。いつも防空訓練をする要領である。それまでボクが会ったこともない人がかなりいたから、町内の大人のほぼ全員が揃っていたと思う。玉音放送の内容がよく理解できなかったからだ。みんな不安にかられ、内容を確認しようと自然発生的に町内集会が開かれたのである。最初は涙を流している人も何人かいたが、議論が進むうちに泣いている人は一人もいなくなった。自分たちの置かれた立場を考えると泣いてなんかいられない、という空気が支配していた。これまで送ってきた豊かな生活が消え去ろうとしていることをなんとなく感じ取っていたのである」⁽²⁾と述べている。

京城帝国大学医学部助教授田中正四は「正午、玉音を聞いた。すべてが終わったのだ。新しい苦難の道が待っている。(中略)玉音をきいた時は少し涙が出かかった。ポツダム宣言受諾の経緯が ажирかになった時はむしろ落ちついていた」⁽³⁾と述べている。仁川府議会副議長小谷益次郎は「昭和20年8月15日の重大放送は、急転直下、日本人が死の溪谷に墮落した事を自覚せしめ、この衝撃が人人を放心状態に導き、政治の空白は混乱をもきたらすようになった。ただ目前の問題は、日本人と朝鮮人の地位の顛倒、朝鮮人の襲撃迫害と生命財産への危惧、これらを護るための総督府の指令を待ち望んだ。(中略)終生忘れ得ぬ事実直面したに拘らず、その日及びその後の日記は遂に記せられずにあつた。筆者の如何に放心であつたかを物語るものであろう」⁽⁴⁾と述べている。

他方、日本人の目に映った韓国人の対応はどのようなものであったか。上述の田中正四の8月16日の日記には「いつもの通り大学に出かける。街も極めて平穏である。今や外国の地となったこの街の平穏さが、むしろ自分には不思議に思われてならない。(中略) 総督府の前では朝鮮人が示威運動を始めたという風説もある。しかしそれらは当然の事であって、今あらためて驚く価値もなさそうである。街には日の丸を巴まんじにぬりつぶし、四隅に易者の広告みたいな模様の韓国の国旗が氾濫している。電車には屋根の上迄はいあがり、トラックは人が満載して万歳の叫びをあげながら右往左往している」⁽⁵⁾と記して、時代の反転を冷静に受け止めている。小谷は「朝鮮人は夜になると焚火して、街頭に集合、独立万歳を連呼しつつ狂喜乱舞すること、17、8日頃まで続いた。日本人を襲撃する様子は見受けられないが、日本人は戸を鎖して戦々競々としていた」⁽⁶⁾と記している。

日本人によっては、放心・不安で敗戦を見る人もいれば、諦観している人もいたことが見受けられるが、植民地当局が温存されていたため、他の敗戦国のように無政府状態になって、恐怖の無秩序に陥ることはなかった。

(2) 韓国人の対応

敗戦と解放という相反する認識を持った日韓の両民族であったが、両方とも8月15日の当日には静かであった。韓国の歴史書に掲載されているソウルの町で歓喜する韓国群衆の写真は少なくとも8月16日からの光景である。終戦時、京城女子専門学校(梨花女子専門学校)1年生だった羅英均は「終戦のうわさを聞いたとき、正直、私は韓国が解放されてうれしいという喜びよりも、うんざりしていた戦争がついに終わったのかというほっとした気持ちが先に立った。そして次にはこれから私たちはどうなるのだろうという不安が芽生えた」と述べている。なお、学校で勉強したこと、父母より尊敬する先生が言ったこと、新聞やラジオが騒ぎ立てたことなど、嘘が続いてきたすべての公共機関への憤りのため、「解放が私に与えたもつとも大きな感慨は、だまされたという気持ちだった」と述懐している⁽⁷⁾。

朝鮮人の中でも植民地支配を避けたい現実と受け止めて、進んで創氏改名して植民地政策に協力した人も少なくなかったため、すべての朝鮮人が手放して解放に歓喜したとは言えない。しかし、大半の朝鮮人は喜び、特に海外で抗日独立運動をしていた人々、政治犯として投獄され刑務所で解放を迎えた人々の歓喜は極まりないものであったであろう。

2. 権力の移譲

(1) 日本の降伏と朝鮮半島の分断

米国は戦後計画の中で、日本から解放された韓国に5年間の信託統治を実施してから政府を樹立する計画を立てていた。朝鮮が近代的な国家樹立のないまま植民地になったため、自治能力がないと見做したからである。原爆投下などで日本の降伏が早まったと判断した米国は、8月11日日本軍の武装解除のため、朝鮮半島に北緯38度線を画定して、その以南は米軍が、その以北と満州はソ連軍が当たることとした。ソ連も同意したので、8月26日ソ連軍が平壤に進駐し、米軍は9月8日仁川上陸してソウルに進駐して、9月9日朝鮮総督府で日米間の降伏調印式が行われた。

敗戦とともに日本人と朝鮮人の状況が一変したが、日本人が危惧した極度の治安の乱れはなかった。韓国人は自分たちの国家と民族の将来がどうなるのか分からないまま、解放の時空に投げ出されたが、韓国民衆は抑圧から解放された歓喜と憤怒を抑えきれなくなった。前掲の田中日記からその光景を見よう⁽⁸⁾。

京城府内に於ける朝鮮人の多衆示威行動は全鮮的に波及拡大し、勢力の走る処、戦時中に於ける彼等朝鮮人の最も苦痛とせる食糧の供出及び労務動員を強行せる郡・面・駐在所等の官

公吏に対する反感よりして、民生及び警備機関事務所の占拠、職員の迫出し及び暴行、食糧倉庫より物資の掠奪、武器庫よりする武器弾薬の奪取、神祠放火等の誠に容易ならざる事態を発生せり。

(2) 米軍進駐前

権力の移譲については、9月9日の降伏調印式の以前と以後に分けて見ることにする。統治力が大分低下したものの、朝鮮には総督府、警察、朝鮮軍の組織が維持されていて武力を保有していたため、決して権力の空白状態ではなかった。8月15日の朝、朝鮮総督府政務総監遠藤柳作が穏健な独立運動家である呂運亨を自宅に招いて治安対策を委嘱した。呂運亨らは将来への国家づくりのため朝鮮建国準備委員会を設立して、全国的な組織を作り、16日には安在鴻が京城放送局を通して韓国民に3回にわたり、委員会の意志を放送した。その内容について、総督府は委員会が本来の使命を逸脱することをするが、総督府行政の治安維持に協力するのが委員会の使命であり、総督府としてはその建前から委員会の活動を認めて、いささか逸脱することも不問に付していた⁽⁹⁾。何れ引揚げるべき日本人のため、朝鮮人と不要な衝突を避けるのが得策と判断したからである。

しかし、安在鴻の放送内容について、『京城日報』は「かかる問題は、当局は日本帝国の名に於て将来四国代表との間で折衝決定すべきものであり、個々の団体の関与すべき筋合のものではない」(8月20日付)、「朝鮮の独立には極めて多大の前提条件を必要とするが、なかんづく日本の停戦に関する処理が未だ解決されず、右に関する権限を附与されたマッカーサーと日本帝国代表との間に話が未だ開始されてみない今日に於ては、独立政府の樹立は未だ議題たり得ないのである」(8月21日付)と、政府づくりを急ぐ独立準備委員会の活動を否定したうえ、「(日本と連合国との合意による統治権の授受) それ迄の間は朝鮮に於る帝国の統治権は厳として存し」、韓国民衆による社会秩序の紊乱行為について「朝鮮軍は儼として健在である。今にしてその非を悟らず苟くもその誤を改めずんば、時と場所を問はず断乎武力を行使するの止むなきは、先日の軍当局発表によっても明瞭である」(8月20日付)⁽¹⁰⁾と、警告した。

終戦直後の8月24日外務次官の朝鮮政務総監宛ての「一、朝鮮ニ於ケル我方主権ノ転移時期ニ関スル件」、「二、朝鮮ニ於ケル独立準備委員会ノ成立並ニ之ガ運動容認ノ可否ニ関スル件」⁽¹¹⁾によれば、一については以下のようなものである。

朝鮮ニ関スル主権ハ、独立問題ヲ規程スル講和条約批准ノ日迄法律上我方ニ存スルモ、カカル条約締結以前ニ於テモ、外国軍隊ニ依リ占領セラルル等ノ事由ニ因リ、我方ノ主権ハ事実上休止状態ニ陥ルコトアルベキコト。

進駐軍の占領とともに総督府の権力が停止すると認識した総督府は、朝鮮建国準備委員会について二で以下のように述べている。

独立準備委員会運動ハ、之ヲ抑圧スルコトニ依リ、民心ヲ我方ヨリ離反セシムルハ適当ナラザルコトト思料スルモ、治安維持ノ見地ヨリ、アラユル留意ヲ払ヒ、憂ヲ後ニ残サザル様セラレタキコト。

要するに治安は維持するが、朝鮮にいる日本人の安全のため、不要な衝突を避けようと、朝鮮建国準備委員会などの政治組織の活動を許容の範囲内で黙認する姿勢であった。そのため、米軍の進駐を前後にして仁川、ソウル、その他の地方などで日本の警官によって殺害された朝鮮人も数人いる。9月8日、米軍の仁川上陸に際して韓国群衆が歓迎行進をする際、群衆が警戒線を超えたため、日本警察が発砲して2人の死者が出た。日本の官憲は依然として最小限の強制力を保持し、韓国群衆も興奮状態で葬儀を行ったが、衝突は起こらなかった。この事件は、米軍進駐後に米軍によって調査されたが、日本警察の正当性が認められ、責任が問われることはなかった。

(3) 米軍進駐後

9月6日、米第24軍先遣使節ハリス代将らが京城第1飛行場（金浦）に到着し、朝鮮ホテルに宿泊した。降伏交渉はハリス代将と遠藤政務総監の間で行われ、9日午後4時から朝鮮総督府で行われた降伏調印式には米国からは在朝鮮米国軍司令官ハッヂ中將、キンケード海軍大將、日本からは阿部総督、上月朝鮮軍司令官らが署名した。その後日の丸が降ろされ、米国の星条旗が上がり、総督府の正門前に雲集した朝鮮人は拍手を送り、総督府の日本人は涙を呑んだ⁽¹²⁾。総督府は米軍政庁に変わり、米軍が絶対権力者となった韓国では日本軍の復員が優先的に行われた。米軍にとって日本軍の復員は軍事作戦でもあった。

米軍政庁は9月7日の布告第1号をもって、軍政期間中英語を公用語として統治したが、軍票については布告第3号の規定を変えて、発行せずに朝鮮銀行券を使用した。植民地機関の日本人官吏、企業の日本人は解雇され、その空白を韓国人が埋めた。大体、9月中旬から10月中旬にかけて行政部門において韓国人に置き換えられ、必要な僅かな日本人官吏のみが組織維持のため残った。当時の帝国大学医学部教員の田中正四の日記には「小使が一躍何とか委員長になり、日本人の課長殿は道ばたに家財道具をならべて売っている。物価は日ましにあがるので、全然収入のなくなった俸給生活者は、何か売って食って行くより他に術がないのである」⁽¹³⁾と記されている。

末端であった朝鮮人の官吏、巡査が幹部になり、使用人だった朝鮮人が主人、社長になることはすべての分野で起こった。最初は日本人に厳しく、朝鮮人には寛大であった米軍も両方の本質が分かってからか、次第に日本人に協力的になった。

3. 日本人の引揚げ

終戦時、人口25、6万人の仁川には2万人余の日本人が居住していた。終戦時の海外には軍民を合わせて660万人くらいの日本人がいたが、日本内の食糧と家屋事情が悪化したため、またはもう外地に定着してしまったため、引揚げを躊躇う人々も多く、引揚げずに残留・再建・前進へ意気込む人々も多かった。一方、米軍が進駐する前に財産を処分し、大量の貨幣をもって密船で素早く日本に帰った人もいた。それができた人々は政府の命令に忠実に従った普通の日本人たちではなかった。

(1) 残留への希望

「京城日本人世話会 報第10号（1945年9月12日）」には「朝鮮語講習会（申込殺到、70名突破につき締切り。12日から開催。なお近く、もう一カ所増設）」、「第11号9月13日」には世話会の伊藤事務局次長が「呆然自失、不安と悔悟に暮れるよりも、我らは朝鮮語を習って、新朝鮮に新たな協力をなすべきである」と激励したと記されている。つまり、朝鮮に残留するために朝鮮語を習い、中には朝鮮への帰化までも決心した人もいた（第15号9月17日）⁽¹⁴⁾。豊かさや安定を求めて朝鮮に渡ってからもう定着していた日本人は漠然と残留を希望したものの、果たして可能かという見通しもないままであった。

(2) 世話会結成と引揚げの決心

8月25日、ソウルに総督府からの支援金を運営資金とする京城日本人世話会が結成されたことを皮切りに韓国の主な地域に世話会が結成された。米軍政が実施されてから植民地権力は米軍に委譲され、植民地機関は解体された。米軍政下の行政機関では日本人の代わりに朝鮮人が働くことになったので、日本人を保護してくれる日本の権力機関は皆無であった。日本人によって各地に組織された世話会（最初は日本人会）が日本人の唯一の民間機関であって、米軍政と協議しながら引揚げの手続きをする傍ら、満州と北朝鮮からの脱出日本人、残留日本人の世話をした。本稿では割と活動の内容が詳細な京城と仁川の世話会の記録に基づく。

仁川日本人世話会の場合、「我等は前進と再建設あるのみ、後退を欲せず。我等は祖国の復興と興隆のため、海外の第一線に踏み留まる。残留することにより、祖国の苦痛を少しでも緩和し得る。」のような主導者の構想から見られるように残留を希望する日本人を中心に組織され、そのような意志の下で引揚げも可能と考えた⁽¹⁵⁾。海外居留民として居留地建設を構想したので、引揚者の荷物預託事務、不動産売買事務、日本人財産管理はその道程であって、総合病院の開設、小学校の設置と授業開始なども構想した。当然、日本人の中には即時引揚げ者らもいたので、このような世話会に不安と不満を持って非難が起きた⁽¹⁶⁾。

しかし、9月14日のサンフランシスコ放送でトルーマン大統領が「朝鮮滞在日本人は放逐する」と言及してから、10月13日に単独帰還軍人の引揚げが開始、次に軍人復員者、続いて一般民の引揚げが米軍の指揮の下で行われることが発表された。さらに、12月の法令33号により全面的に日本人撤退が決定されたため、残留希望者らも引揚げに応じ、世話会も「日本人の撤退を世話する世話会。北方からの脱出同胞の救済・収容・送出」に使命を変えた⁽¹⁷⁾。

(3) 引揚げの手続きと交通手段

終戦直後には個人が自分の家族を連れて闇船などで引揚げた例もあるが、米軍進駐後には米軍政庁の許可なしには引揚げることができなかった。

【引揚の順位】米軍政庁が実施した日本人送還を『引揚1945年9月25日から1945年12月31日』『出国日本人輸送の優先順位の確立』で見れば、(1) 現役の日本軍部隊、(2) 休暇中および除隊した軍人とその家族、(3) もと日本人警察官など、望ましくない者、(4) 神官、(5) 日本人鉱山労働者の順になっていて、復員を最優先したことが分かる。その次に一般民間人の援護対象者、その他一般民間人、上級公務員と上級の会社職員の順になっている⁽¹⁸⁾。その中、神官と芸者・娼妓は望ましからざる日本人として急遽日本への撤去が要求された⁽¹⁹⁾。

【手続き】総督府は「終戦事務処理本部」を開設し、その組織の一つに保護部があって、日本人の引揚げと戦災者の救済を担当した。保護部が七つの都市に案内所を造り、案内所は米軍政庁外事課の管轄下に置かれた。1945年11月末、案内所の引揚業務は日本人世話会に吸収され、12月1日まで全朝鮮の案内所の活動は京城日本人世話会に引き継がれた⁽²⁰⁾。外事課と世話会との連絡は指令を通して維持され、世話会は連合国総司令官の指令に従って、現地の日本人団体に対して、登録、引揚順位の決定、予防接種（天然痘、腸チフス）、個人別証明書の発行といった仕事を行った⁽²¹⁾。

【搬出財産の制限】早く引揚げるために韓国人に財産を投げ売りした日本人も続出したが、米軍進駐後の9月25日に法令第2号「敵産ニ関スル件」によって、8月9日以後財産処分禁止と現状維持義務が命じられた。なお、10月の連合国総司令官令などによって引き揚げる際の持ち出し財産と荷物の制限があって、民間人一人当たり千円に限り港で交換でき、金と銀、有価証券、金融上の書類、銃、カメラ、宝石、美術品、収集切手などの国外への持ち出しが禁止された⁽²²⁾。携行荷物は自分で持ち運べる荷物以外には禁止され、荷造りと歩行の研究と練習に苦心した。以下は、仁川からの引揚げの光景である⁽²³⁾。

乳呑児を持つ母親が荷物の大半を分担してくれる背を活用するために、赤坊を袋に入れて頸から胸へとつるして一歩一歩、歩く姿である。また歩行出来る子供は皆大人に習って、それなりの荷物を背負わされている。其の重さに堪えかねつつ母親の前後を泣きつつ、歩いて行く。筆者は堪え兼ねて、抱きしめ、共に泣いた。誰が罪なき者に負わすのか、責任者は誰か、社会の一線にあった我等ではないか。筆者の謝罪の涙はとまらない。今後の日本国民の運命が、この子供に如実に現わされている。負い切れない重荷を負うてあえぎつつ、苦難の道を歩かねばならぬとは。呪われた運命の引揚げ者よ、何処へいく。

【交通手段】ソウル周辺の日本人は龍山から客車1室に75人ずつ乗車して、釜山に向かった。釜山からは日本の船舶に乗って、博多もしくは山口県の仙崎に引揚げ、上陸後には各々の縁故地に向かった。一時期、韓国南部地域に疫病が流行ったため、引揚げ港が釜山港から仁川港に変わったこともあった。

釜山に着くと乗船を待つため、学校などに収容される。各自の特別乗車船証明書を提示した後、乗船券が渡され、乗船する時にその乗船券と引き換えに日本内の行先駅までの無賃切符が交付される。船が日本に着くと、その県知事名で一家族に一枚の割で外地引揚げ証明書が、戦災証明書または乗車船証明書で交付されるとともに一人10枚の外食券が渡された⁽²⁴⁾。故郷に帰る喜びを胸一杯に抱いて釜山から10時間かかって博多に着いても、夕方税関員が帰ったら翌朝まで空腹で待たねばならない。米兵に船長の乗船人員報告が済むと、下船・検疫・荷物検査をする。税関員の検査も冷たい⁽²⁵⁾。満身創痍の引揚者が戦争に負けた満身創痍の祖国に戻って来た。新しい苦難が待っていてもそれでもそこは日本であった。朝鮮半島38度線以南、即ち米軍占領地である韓国からの引揚げは不幸中の幸いなものであったが、日本までの帰路は敗戦から数か月はかかる苦難の道であった。

(4) 仁川からの引揚げとその後の日本人町

『仁川引揚誌』によれば、仁川からの引揚げは10月27日第1回引揚げ（軍人とその家族）、10月28日第2回（2,177名）、11月11日第5回引揚げ（一般人1,846人）のように段階的に進み、1946年3月2日午後、世話会（会長：小谷益次郎）とその他の残留者が引揚げて、一応引揚げは終わった。小谷らは列車で仁川から移動して釜山に着き、4日釜山港を出発して5日午前博多港に到着した。その後、小谷は長崎の諫早に定住したようである。一部の日本人らは、1946年3月2日に仁川日本人連絡部（川名一郎）を結成して、残留日本人と北朝鮮からの脱出者の連絡・送還、日本人墓地保護などの目的で残留したが、1947年1月12日仁川日本人連絡部22名が引揚げ、列車と船舶で移動して20日佐世保港に着いた⁽²⁶⁾。

日本人が引揚げてから、日本人町には韓国人が住み着き、植民地時代のインフラ、建物、家屋などは殆ど残って、今も現存しているものもある。しかし、日本の象徴である神社は日本人によって処分されたり、一部は韓国人によって放火された。仁川の栗木里（現在の栗木洞）に日本人墓地があったが、墓は破壊され、1960年代初めまでそのまま放置されていた。その後、公園に造成されたため、墓地の痕跡は残っていない。

4. 残された日本人

長年に掛けて築いた財産を捨てて、日本に引き上げることになるとは夢にも思わなかったことで、朝鮮に残って再建を試みる人もいた。しかし、米国がすべての日本人の引揚げを決定したため、残留を希望した人々も引揚げを決心した。引揚げは段階的に行われて、概ね1946年3月に終了したが、米軍政への協力のため一部の総督府の官僚、鉄道従事者、工場の技術者などの引揚げは遅れた。最終的に韓国に残された日本人は朝鮮人夫の日本人妻、孤児、または仁川の「旭町の小町」のような数奇の境遇者であった⁽²⁷⁾。

それでも引揚者は日本の地を踏み、帰郷して親族と再会した。それからまた新しい苦難の生活が始まったが、残された人は一生望郷の念を抱きながら他国暮らしをしたであろう。筆者の町にも残された日本人妻がいるという話を聞いたことがある。朝鮮人夫と結婚した日本人妻らは、日韓国交正常化後の1966年「芙蓉会」を結成した。その後、高齢者の中には慶州のナザレ園（高齢者養老院）に居住する人もいる。

5. その後の朝鮮半島

米国が中心となって計画した戦後計画は、独立後の韓国を米・英・ソ・中の4連合国による5年間の信託統治下に置く構想であった。近代国家を造れずに日本の植民地になったため、韓国に自治能力がないと見做した米国は5年間の信託統治後に政府を樹立する計画を立てた。1943年12月に宣言されたカイロ宣言にも「朝鮮の人民の奴隷状態に留意し、やがて朝鮮を自由、独立のものにする。」と含意されている。そのため、1945年12月モスクワで米・英・ソ3相会談を開き、信託統治を決定したが、韓国民は反託（右派）と賛託（左派）と分裂して激しく対立した。さらに米ソ冷戦の進展により、信託統治問題をめぐる米ソ共同委員会も1947年9月に決裂した。その後、朝鮮問題は国連に移管され、米軍占領下の38度線の以南では国連臨時朝鮮委員会の監視下で1948年5月10日単独の総選挙が実施されて、7月に国会で憲法が制定され、8月15日韓国政府が樹立された。他方、総選挙に反対したソ連軍占領下の38度線以北では、最高人民会議の選挙を経て、9月9日に北朝鮮政府が樹立され、朝鮮半島にはイデオロギー的に相反する二つの分断国家が生まれた。解放時には予想だにできなかった歴史の悲劇であった。

植民地時代、朝鮮の域外には左右の独立運動勢力があり、国内にも地下に潜っていた共産主義者がいたため、総督府の官憲による厳しい取り締まりはあったが、その勢力は微々たるものであった。左右のイデオロギーとほぼ無関係であった朝鮮では解放とともに左右の対立が激しくなって、韓国地域では左翼による暴動とストライキが多発した。米軍政下の韓国社会は全面的な不安定に陥って、政局は分裂され、経済は停滞し、民衆は無秩序と貧困に苦しんだ。植民地時代を経験した年配の人が「日帝時代は良かった」と話すことを何度も聞いたことがある。そうであろう。植民地時代には他国に支配されて抑圧的ではあったが、それなりの安定した秩序はあった。民主化運動の無秩序に懲りた人が「却って、独裁時代の方がよかった」と吐くことと同様な自嘲であろう。

終わりに

本稿では朝鮮半島の38度線以北の北朝鮮からの引揚げと社会実情については紹介していないが、米軍政下の韓国でも暴力、略奪、殺人など悲惨なことはあった。それでも朝鮮人の中には北朝鮮から脱出する日本人らに協力した人、引揚げる日本人の移動に協力した人、親切に食べ物と金銭を与えた人、引揚げる時まで同居を許した人、釜山まで見送った人もいた。ソ連軍政下の以北とは比較にならないほどであった。ソ連軍の蛮行については良く知られていることであって、14歳で終戦を平壤で迎えた日本人から「(ソ連軍は) 昼は男狩り、夜は女狩り」という話を聞いたことがある。『京城日報』10月29日付けに「京城は極楽です。感涙に咽ぶ戦災者達。北鮮在住の同胞を見殺しにするな。宛ら地獄の生活惨、大学生が塵箱漁り」⁽²⁸⁾と報じられている。ソ連軍政下の以北では朝鮮人も日本人に対する加害者であったが、ソ連軍に対してはともに被害者でもあって、程度の差があるのみであった。北朝鮮からの引揚げの場合、個別的な脱走であったが、計画的に大船団を組織して1946年8月25日には安東と新義州から木船11隻に1,534人が乗船して仁川に入港したこともあった。彼らは米軍によってソウルの日本人世話会に移管された。終戦から1年後のことである⁽²⁹⁾。

解放の時空における韓国民衆は日本の植民地当局と米軍政との間での客体でしかなかった。日本人が引揚げた空白を韓国人が埋めることになったが、米ソによる分割占領は南北分断に繋がった。自力で国民国家の樹立ができなかった朝鮮半島の試練は今日も続いている。

注

1. 森田芳夫・長田かな子『朝鮮終戦の記録・資料編第1巻』巖南堂書店、昭和55年、15-16頁。
2. 吉原勇『降ろされた日の丸』新潮社、2010年、62-63頁。
3. 森田芳夫・長田かな子『朝鮮終戦の記録・資料編第2巻』巖南堂書店、昭和55年、147-148頁。
4. 同上書、203-204頁。
5. 同上書、148頁。
6. 同上書、204頁。
7. 羅英均/小川昌代訳『日帝時代、わが家は』みすず書房、2003年、160-161頁。
8. 森田・長田、前掲『朝鮮終戦の記録・資料編第1巻』17頁。8月16日から25日まで朝鮮全土での警察官に対する暴行、脅迫、掠奪などを見れば、日本人警察官に対する事件が66件、朝鮮人警察官への事件が111件である。警察官・学校長・面職員とその家族などに対する殺害も日本人6件、朝鮮人21件となっている（同上書、13-15頁）。他民族よりも同民族に対する怒りと恨みがもっと強かったことが分かる。その理由は、日本人の下級官吏らの出征のため、官僚組織の下部を朝鮮人が埋めることになり、朝鮮人面職員と巡査らが同民族に供出、徴用などを無理矢理に強要したことへの怨念のためであろう。
9. 同上書、116頁。
10. 同上書、115-121頁。
11. 同上書、122頁。
12. 同上書、27頁、31頁。
13. 森田・長田、前掲『朝鮮終戦の記録・資料編第2巻』156頁。
14. 同上書、63-69頁。
15. 同上書、210頁。
16. 同上書、232-233頁。
17. 同上書、234頁。
18. 同上書、20頁。
19. 同上書、24-25頁。
20. 同上書、7-10頁。
21. 同上書、21頁。
22. 森田・長田、前掲『朝鮮終戦の記録・資料編第1巻』255-257頁、289頁。前掲『朝鮮終戦の記録・資料編第2巻』22頁。
23. 森田・長田、前掲『朝鮮終戦の記録・資料編第2巻』240頁。
24. 同上書、46-47頁。
25. 同上書、103頁、113頁。
26. 同上書、564-584頁。
27. 「旭町の小町」とは、吉原勇『降ろされた日の丸－国民学校一年生の朝鮮日記－』（新潮社、2010年）に出ている近所の満枝姉さんのことである。当時、17～18歳の器量のいい満枝姉さんは米兵に暴行された挙句、米軍の慰安婦に転落してしまったため、彼女の家族が引揚げの際、「あんな恥ずかしい子を連れて帰るわけにはいかないじゃないの。置いてくるしか仕方がなかったのよ」として置き去りにした（同上書、168-169頁）。
28. 森田・長田、前掲『朝鮮終戦の記録・資料編第2巻』48頁。満州と北朝鮮からの引揚者による手記は多数あるが、『流れる星は生きている』の著者藤原ていは満州の長春（新京）から幼い子供3人を抱えて、朝鮮半島経由で1年掛かりで子供を失うことなく奇跡的に長野県の諏

訪に帰って来る。

29. 강옥엽・강덕우資料抜粋・整理『米軍政期の仁川資料・仁川歴史文化叢書8』仁川広域市、2004年、126頁。(原典は『ソウル新聞』1946年9月1日付け) 敗戦・解放と引揚げの際の日韓両国民の実情については、李淵植『朝鮮を離れながら－1945年敗戦を迎えた日本人の最後－』歴史批評社、2012年(韓国語)を参照。李は一次資料に基づいた大衆史的な観点から詳らかに検証している。

参考資料

- ・藤原てい『流れる星は生きている(新版)』偕成社、2015年。
- ・羅英均/小川昌代訳『日帝時代、わが家は』みすず書房、2003年。
- ・森田芳夫・長田かな子『朝鮮終戦の記録・資料編第1-2巻』巖南堂書店、昭和55年。
- ・吉原勇『降ろされた日の丸』新潮社、2010年。
- ・李淵植『朝鮮を離れながら－1945年敗戦を迎えた日本人の最後－』歴史批評社、2012年(韓国語)。
- ・강옥엽・강덕우資料抜粋・整理『米軍政期の仁川資料・仁川歴史文化叢書8』仁川広域市、2004年。